

書 評

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セクション3 アメリカ合衆国』

古今書院 2016年11月 831頁 23,000円＋税

本シリーズ第3巻¹⁾の「アメリカ合衆国」は、原著『新世界地理—地球と人間—』の第16巻(1892年刊行)に該当する。「訳者あとがき」によれば、19巻からなる本シリーズのうち、一巻を一国にあてたのは同国とフランスのみである。しかも著者ルクリュは、1852～57年と本巻校正中の2度、実際にアメリカを訪れている。訳書巻末に付された「黒人法と黒人奴隷」は、一度目の滞在中の見聞にもとづいて1860年に発表された論文で、南北戦争(1861～65年)直前のアメリカで大きな反響をよんだものである。本巻刊行時のアメリカ合衆国は、南北戦争からの再建期を経た「金ぴか時代」にあたる²⁾。この間、1848年に始まるカリフォルニアのゴールドラッシュや1869年の大陸横断鉄道開通に代表されるように、西部開拓(西漸運動)が進み、1890年にはフロンティアの消滅が宣言されるに至る。

本巻の章構成は下記の通りである(括弧内の頁数は訳書のもの)。

- 第1章 総説—国土面積、地質構造、および自然区分—(29頁)
- 第2章 先住民(44頁)
- 第3章 合衆国への入植者、白人と黒人(35頁)
- 第4章 アパラチア山脈と大西洋側斜面(183頁)
- 第5章 五大湖およびミシシッピ川流域(208頁)
- 第6章 ロッキー山脈と太平洋側斜面(134頁)
- 第7章 合衆国の人口と統計(129頁)
- 第8章 政府と行政(29頁)

内容は、第1～3章および第7・8章の系統地理的な概説部分と、第4～6章の地誌的な記述部分とに大きく二分できる。以下では、系統地理的な章を中心に、それと関連する地誌的な章の記述を合わせながら、本巻を紹介していきたい。

第1章冒頭は、「北米のうち、北をカナダ連

邦、南西をメキシコにはさまれた領域に、特段の地理的名称はない」との一文に始まり、「ユナイテッド・ステーツ」や「ステーツ」の「呼称が適合する国家は他にないかのようである」と説く。「アメリカ」の単語も、「このアングロサクソン系共和国の全体をもっぱらに指す言葉として通用」し、「もしもカナダ人やグアテマラ人、ブエノスアイレス人が自分も「アメリカ人」だと名乗ればびっくりするだろう」(1頁)と続けている。この最初の段落は、根本から物事を問い直そうという著者の姿勢の宣言ともいえよう。この後、探検や測量の略史が述べられ、「合衆国の地名体系は非常に貧弱だ、というより、その形成はこれからののである」(15頁)と当時の状況を記している。

自然地理に関しては、カール・リッターの「各国の海岸線の発達度合いがこそが経済的価値の主要な決定因のひとつだが、地図上でそれを正確に測定するのは不可能であり、したがって海岸線の経済的重要度も多種多様である」との指摘を引き、「接近が容易で、旧世界に最も大きく開いた港がある一帯は、人口と通商が最も急速に拡大した」と北東部大西洋沿岸を評価している。次に「気候は全般的にヨーロッパに対応」し、「ヨーロッパからアメリカへの移住は気候面のつらさ」ともならず、「国内で最も人口が集住するの、等温線で摂氏10～13度、等降水量線で750～1,250ミリのあいだで、最も西ヨーロッパに対応する地帯だ」(25-27頁)と環境と人間の関係を説明する。こうした観点は、生態学的な面からヨーロッパによる植民地化を考察したアルフレッド・W・クロスビーの著書³⁾とも重なり合う。アパラチア山脈の植生が「全体的には、西ヨーロッパの植物景観とほとんど変わらない」(第4章, 158頁)、あるいは「東西両海岸の対照的な気候は、旧世界におけるアジア大陸の沿海部と、西ヨーロッパの違いに似ている」(第6章, 580頁)といった説明も、アメリカと西ヨーロッパの類似性をみている。

ほかに地誌的な章での自然地理的記述を拾うと、ミシシッピ川に関し、「歴史上の出来事や交易の動きを決定したのは、とりわけ流域の方向であり」、「ミシシッピ川は合衆国全土の自然的な分

割線で、気候の点でも、文化、住民の点でも、この水流が境界だ」(第5章、310頁)とその役割を強調している。水害対策の堤防を「全体計画もないまま個々の州が建設したため、それ自体が災害の原因」ともなっており、支流ヤズー川の冠水時には、「先住民が築いてあった墳丘が、農業者と家畜の唯一の避難先になった」(355-357頁)。ニューオーリンズの記述でも、ミシシッピ川との関わりが詳細に述べられ(485-491頁)、1825~88年の4時点をかいた「ミシシッピ川デルタの変遷」(367頁)の図は、鳥趾状三角州の変化を示すものとして資料的価値が大であろう。またロッキー山脈の西部に位置するワサッチ山脈の「不毛な高地や山岳、絶壁は「地質学者の天国」と呼ばれ、「重畳する岩層は、裂開や侵蝕により一目瞭然で、地層の厚みや傾斜、あらゆる事変が容易に観察できる」ため、「地質史を再構成するのは極端に困難」な西ヨーロッパに対し、「ここでは世界の地質の歴史が読みとれる」(第6章、524頁)とその学術的な稀少性にふれている。

上記のクロスビーは、植民地化を推進した要因の一つにヨーロッパ人が持ち込んだ家畜の野生化をあげている⁴⁾。これに対応するように、先住民を扱った第2章では、「牧畜段階という社会的状態が…北米にはいっさい存在」せず、「北米先住民は大平原のバイソンも、ロッキー山脈のヤギも飼いならさなかった」(37頁)と旧世界との違いを記している。本シリーズの特徴の一つに先住民に関する記載の豊富さがあるが、本巻もその例にもれず、先住民について、「彼らはずねに対等であり、思いやりと慎み深さもそなえている」、「礼儀作法もすこぶる厳正かつ複雑で、厳密な細心さをもって遵守される」との賛辞が連ねられる。ところが、「アメリカの開拓者は先住民と会合するたびに決まって瞞着し、その返報に不誠実さと残虐さを招くので、「良いインディアンは死んだインディアン」が決まり文句だ」(45-46頁)と白人側の非を鳴らしている。ルクリュにも「幼児期にある諸民族の大半とおなじく、アメリカ先住民の葬礼にも死者との対話がともない」(51頁)といった表現はみられるが、メキシコ国境地帯(当時のアリゾナ準州)周辺にいたピーマ族の灌漑水路について、「彼らの先祖が構築した水利施設はアメリカ人の手本にもなりうるものだ」(67頁)とし、

ニューメキシコ準州にいたプエブロ族の祭事について、「イギリスの経済学者が近代工業による発見のひとつだと自慢する分業体制は、すでにプエブロ族のあいだに古来普及していた」(72頁)と各部族の分担を記すなど、総じてその暮らしぶりに対する評価は高い。そこには、「コロンビア川の峡谷は先住民の移住における最大の中心だった可能性がある」(63頁)との説が引かれるルイス・H・モーガン(1818~81)⁵⁾など、先住民が研究対象として詳細に調査されるようになった当時の学問的関心も関係しているだろう。

本巻執筆時は、西部開拓の動きに抗ってきた先住民たちがウーンテッドニーの虐殺(1890年)を最後に、その組織的な抵抗を終えた時期に相当する。第7章第2節「先住民の人口」もこれに言及し、「この国民的な恥辱の日からのち、先住民の生き残りに対する正義はいつか行われるのだろうか」(671頁)と問うている。本節では白人が厳しく糾弾されており、「自由な先住民が自分たちで物事を沙汰し、農耕や牧畜で生活するなら、人口は正常に増加する」にも関わらず、「被害者の側からみれば、すべての植民地でほぼ同様の欺瞞と暴力、組織的な蛮行の歴史」(664頁)がつづられてきた。「伝染病が、病原菌の付着したぼろ布を意図的に送ったことで猛発生した例が多いことはよく知られている」(663頁)は行き過ぎにしても、「白人くる、ウイスキーくる、天然痘くる、火薬と弾丸くる、絶滅!」という「先住民の諺」(667頁)は、ジャレド・ダイヤモンドの見方⁶⁾にも通じる真をうがったものといえよう。

入植者を扱う第3章では、第1節「初期の入植」で、合衆国独立後の拡大に関し、「西方への移住は、正真正銘の人間の流れという趣き」があり、「ひとつの国民全体が自由に、かつ平和裏に進んでいったこの動きは、戦いによる移住史をはるかにしのぐ」と述べ、「土地を選んだり、入植者数を管理したり、将来の住民同士の間隔を立法化したりする官僚のもとで進められる公式な植民地の拡張など、いかにみすばらしい規模であることか」(85頁)と開拓の奔流をとらえている。例えば1889年の法令により、インディアン準州内に設けられたオクラホマ準州では、「都市計画図も作成済みで、人々はまだ目にもしていない土地を競りて売買し」、「定刻 [同年4月22日正午…訳注(以

下同様に表記]になると大群衆[約3万人]がスタートラインから飛び出し、新たな土地を求めて殺到した」(第5章、482頁)と、人々の熱狂ぶりを鮮やかにえがき出している。

次の第2節「白人系の要素」では、移民をイギリス系・アイルランド系・ドイツ系・フランス系・スカンジナビア系・イタリア系と細分化し、各々の特徴を記している(87-96頁)。地誌的な章でも、メイン州のフランス系カナダ人(第4章、162頁)、ペンシルヴェニア州のドイツ系移民・東ヨーロッパ系移民(235頁・246頁)、ニューメキシコ準州・アリゾナ準州でのメキシコの要素の卓越(第6章、602-603頁・609頁)など、各所で民族的多様性にふれている。第7章第1節「人口推移」では、1890年の国勢調査にもとづき人口分布を経度別・緯度別に示す図(637-638頁)や人口密度の図(641頁)、白人・黒人移民の出発地・到着地をあらわす「移民の流れ」の図(652頁)を収めるほか、東・南ヨーロッパからの移民増加に関して、「大手の製造業者が東欧や南欧に特派した口入れ屋たちは…初期の中国人移民にみられたのと同様、ヨーロッパの働き「手」を集めている」(655頁)と冷静に分析している。その中国系移民については、「大地主たちは、割り振られた仕事にこれほどの従順さや精確さ、時間の正確さをもって取り組む黄色人種の労働者にひきくらべ、白人労働者を低く評価するのをやめはしない」(656頁)と、労働力としての評価が高かったことを叙述している(なお第3章第4節は「中国系移民」にあてられている)。「人口学的にみると、すでに数世代にわたり定着してきた住民よりも、これらの新参者のほうが大きな作用を及ぼし、「移民が流入しなければ人口は減少するだろう」(657頁)との見立ては、今のアメリカにも共通する部分がある。「かくも混交したアメリカの人種は、環境の影響のもと、肉体面では北米先住民に接近したように見え、肌や毛髪からまなざし・顔つき・物腰などに至るまで、「北米先住民は死ぬことにより、自分の破壊者のなかに再び姿を見せていると言えるのかもしれない」(661頁)と、アメリカ人の体格はやや皮肉まじりに表現されている。

第3節「黒人奴隷制と南北戦争」では、それらのあらましを述べた上で、解放後の状況について、「肌の色の対照性と、積み重なった過去の怨

みがある」ために、「和解はまだずっと先のことだろう」(101頁)との見通しを述べる。この見通しは巻末付録の論文の記述とも呼応している。すなわち、奴隷制による「心性の劣化は奴隷全体を腐敗させ」(807頁)、「隷従はかくも快適」(813頁)という状況を生み出す。「奴隷主が黒人を完全に圧伏するうえでお気に入りの方策は」、「[アメリカ黒人](市場で農園主が買い取った層…評者注)と「地元生まれの黒人」を分断する憎悪」などを利用した分断支配であり、「黒人を優しく、おとなしくさせるので、主人の金銭的利益に有利です」とうたう「宗教もうまく使えば暴虐の強力な道具である」(820-823頁)。実際、この論文の末尾近くでは、若きルクリュ自らが黒人の宗教儀式(彼の言によれば「宗教茶番」)に居合わせた体験が苦々しく報告されている(826-828頁)。同じく黒人を取り上げる第7章第3節「アフリカ系アメリカ人」では、「アラブ人に悪口雑言を浴びせる多くの入植者が、家内労働と農場労働のいっさいを彼らにまかせている」アルジェリア同様に、「黒人の労働が不可欠」(678-679頁)となっており、「何ら土地を与えるものではなかった」1863年の奴隷解放宣言は、ロシアの農奴解放令(1861年)において「領主が可耕地の一部を農奴の一部に売ることを義務付けたことにも及ばない」(680頁)と評している。こうした同時代の他地域との比較対照は、単著での全世界の地誌である本シリーズの大きな武器である。

第5節「アメリカ国民の課題」は、頁数こそわずかながら、ルクリュのすぐれた情勢判断力が読者をひきつける部分である。「懸念すべきなのは、あまりに急速な国土の拡張であり」、政治家や新聞がハワイ諸島やキューバなどの「併合を繰り返し求めた」(105頁)結果は、歴史の証するところである⁷⁾。「ニューヨークの金融街ウォール・ストリートはキャピトル[連邦議会]以上に真の政府の所在地だ」(106頁)という権力偏在の問題と、「アメリカという共通の母国における人種間の同盟ができ上がっていないことは、流血沙汰が何度も示してきたところだ」(107頁)という多民族国家としての課題は、ともに大きなものとして著者に認識されていた。同章の最後には、ウォルト・ホイットマン(1819~92)による『草の葉』中の詩「諸外国への挨拶」を引用し、「遅れてやって

きた国家アメリカが、…諸国の共同の営為に最も大きな役割を果たす国家のひとつであることは、間違いない」とした後に、「だが、あらゆる人種とすべての大陸の人間による連帯の埒外に、何らかの進歩を達成するなど、考えられるのだろうか」(108頁)と、アメリカのありようをさらに普遍化してとらえようとしている。

地誌的な記述をふまえた第7章は、先にふれた第1～3節の後、第4節「土地所有制度および農業」、第5節「鉱業」、第6節「製造業」、第7節「通商および交通路」と、産業別の節が続く。農業面ではホームステッド法やタウンシップ制が説明され、「土地所有規模が相対的に大きいことは、アメリカの農作業に機械や工業的手法が急速な重要性を占めるに至った理由」であり、「この点で合衆国が世界第一位であることは間違いない」と指摘する。農民たちは、「脱穀機や刈り取り機を喜んで運転」し、「妻や娘が野良仕事にたずさわるのを承知しない」(687頁)という気質を有している⁹⁾。「小農にとっていちばん深刻なのは、…農地の工業的な開発をもくろむ大型トラストの組成」であり、住民の巨大資本への従属を、「北米住民の将来に対する重大な脅威ではあるまいか」(690-691頁)と重くみている。同章以外でも、シカゴの食肉生産の出荷量をあげて、「この数字をみるだけで、「アメリカ産肉」がどれほど重要な関税や外交上の問題か、理解される」(第5章、414頁)とするなど、今日のアグリビジネスがすでにこの時期に胚胎していたことがうかがえる。

鉱業については、カリフォルニアでのゴールドラッシュを、「金こそが太平洋岸への入植をもたらし」、「アメリカ史のあらたな時代の始まりである」(705頁)と評価する⁹⁾一方、鉱山や製塩場・石切り場の「利益はトラストを組成する資本家たちの手に集中する」(717頁)と富の偏在を指摘する。いくつかの企業城下町があらわれるなど、急速に発達していた製造業も合わせ、「巨富はすこぶる不均等に分配されており、他のいかなる国も、これほどの速度で少数に富が集中した例」はなく、「今日の同国は、恒久的貧困と、膨大な資本集中とが、すでに社会の両極として向き合っている」(721頁)。これら産業の発展に不可欠だったのが交通、なかんずく鉄道であり、「鉄道が都市の誕生に先行し、遠く無人地帯へと前進して

いった」(727頁)。鉄道会社は「時刻表の混乱や商業上のトラブルを避けるため合意に達し、経度15度ごとの標準時帯に大陸を分割」し、「広大な地所の運用にもたけており、自社路線を動脈にする領域全体の覇権をにぎることができた」(730-732頁)と、各方面に大きな力を及ぼしていた¹⁰⁾。「国家機構においては廃絶された王政が、産業と金融においては再び姿を現している」(734頁)というジェームズ・プライス(1838～1922)¹¹⁾の引用は、すこぶる象徴的である。

続く第8節「公教育」および第9節「信仰および宗教団体」の中にも、今なお引き継がれるアメリカの諸特性が随所で書き込まれている。女性教育が早くから盛んな一方で、大学は「勉強に打ち込むべき時間のかなりが運動競技に向けられ、科学的精神にまったく逆行する肉体の精神という致命的な方向に身をゆだねる」(744-745頁)欠点も有している。「世界で印刷される新聞雑誌の過半は英語で記され」、「アメリカの新聞のいくつか」が「正真正銘の威力をそなえている」例として、新聞記者として資金提供をうけたスタンリーによるリヴィングストン捜索(1871年)をあげ、「この企画こそが暗黒大陸の征服と「アフリカ分割」の始まりになった」(747頁)とその存在の大きさを指摘している。宗教面では、「合衆国憲法によれば、キリスト教会は完全に国家から切り離されている」¹²⁾(749頁)はさすが、「鉄道の開通式にも祈祷がともなう」(758頁)ほか、「アメリカの日常言語も文芸も、教育の基礎がキリスト教的であることを示し」、「新聞でさえ、聖書の章句や福音書の文言、戒律に由来する格言的な表現で埋め尽くされる」など、その影響力は「スコットランドをのぞくいかなるヨーロッパ諸国よりも強力であるようにみえる」(760頁)。章末では、ヘンリー・ジョージ(1839～97)¹³⁾やエドワード・ベラミー(1850～98)¹⁴⁾による社会主義的コロニーの試みにもふれられており、無政府主義者(アナキスト)であったルクリュの立場との近さを思わせる。

最後の第8章では、政治に焦点があてられている。アメリカの共和制は、「散在する人口がまだ全面的に植民地体制のもとにあったころ」のニューヨーク地方の共同体を起源とし、「固有の活動をそなえる大量の細胞が生命体を構成するのとおなじ」(763頁)ように、その全体集合が国を

なしている。独立宣言や憲法は三権分立や「人権に関する抽象的な理論 [権利章典]」を取り入れているが、現実の下院では「法律家が過半を大きく」上回り、「トラストは「議会の内側からと同じくらい外側からも影響を及ぼすことができる」¹⁵⁾」(773頁) 状況にある。「合衆国憲法ほど解釈が困難な法規はどここの国にもない」ためか、「判事と弁護士がこれほど多い国もない」(780頁) という司法事情は、訴訟社会アメリカの淵源を思わせる。「大統領選は、いかなる代償を払っても勝利せねばならぬ競技のような情熱に支配され」(775頁)、「連邦政府はますます「職業政治家」や「専門家」の手にゆだねられ」、彼らは「思想を表現するのが目的ではなく、大衆を喜ばせる技術として」話術を学び、「実務では、他者の情熱や愚劣さを自分の利益になるよう利用し、いっそうの儲けをもたらすようにする練習を行なう」(778頁) 等の苦言は、決して古びてはいまい。

本シリーズの既刊分にもましてルクリュの筆が鋭く思われたのは、やはり彼自身のアメリカ体験によるのであろう。またヨーロッパ人やアメリカ人自身によるアメリカ研究がさまざまな分野で活発に進められていたことは、地図(196葉、ほかに口絵5葉)や挿画(67点)の充実ぶりからもうかがえる。評者はこの大著をひもときつつ、今のアメリカ、ひいては先進国のさまざまな課題(例えば資本の集中や政治の劣化)が、この「金びか時代」のアメリカに根ざしているように思え、考えさせられることたびたびであった。当時のアメリカの実情を地域に即して詳細に伝える本巻の記述は、貴重な資料というにとどまらず、現代世界の諸相を映し出す鏡にもなり得よう。

なお、訳者によれば、ルクリュはジュール・ヴェルヌの『グラント船長と子供たち』(1866～67年)に登場する地理学者バガネルのモデルともされている¹⁶⁾。南半球版の『八十日間世界一周』ともいうべき同書には、バガネルの台詞も借りつつ当時の地理学的知識がふんだんに盛り込まれており、同時代的な文学と科学の関連として興味深い¹⁷⁾。他方、フランスでロジェ・ブリュネ(1931～)主導によって1984年に創立され、世界地誌のシリーズを編集・刊行した公益組織Réseau d'Étude des Changements dans les Localisations et les Unités Spatiales(立地と空間的まとまりの変

化に関する研究ネットワーク)の略称はルクリュ RECLUSとなっており、いわゆるヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ派地理学との相違を意識して命名されている¹⁸⁾。このような同時代的な背景や、フランス地理学の系譜¹⁹⁾の中にルクリュの本シリーズをおいてみると、さらにさまざまな発見が可能であろう。

(三木一彦)

〔注〕

- 1) 既刊分は以下の通り。①エリゼ・ルクリュ著、柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セクション1 東アジア—清帝国、朝鮮、日本—』古今書院、2015、814頁。②同上著、同上訳『同上2 北アフリカ第二部—トリポリタニア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、サハラ—』同上、2016、878頁。上記への拙評は、①歴史地理学58-3、2016、39-43頁。②歴史地理学59-3、2017、31-34頁。なお、①には以下のような書評もある。青山治世「〔書評〕エリゼ・ルクリュ著・柴田匡平訳『東アジア(清帝国、朝鮮、日本)—ルクリュの19世紀世界地理』(古今書院、2015年)」亜細亜大学アジア研究所報162、2016、8-9頁。
- 2) 「金びか時代」の名称のもととなった①マーク・トウェイン、C.D.ウォーナー著、柿沼孝子・錦織裕之訳『マーク・トウェイン コレクション19A・B 金メッキ時代 上・下』彩流社、2001～02(原著1873)は、当時の拝金主義の風潮を巧みに伝えている。また、②内村鑑三著、鈴木範久訳『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』岩波文庫、2017、145-166頁は、拝金主義や人種の偏見に満ちた「キリスト教国の第一印象」を述懐している(内村の渡米は1884年)。「金びか時代」の様相や、その内村との関係性については、③紀平英作・亀井俊介『世界の歴史23 アメリカ合衆国の膨張』中央公論社、1998、287-290・360-398頁に記述がある。
- 3) アルフレッド・W・クロスビー著、佐々木昭夫訳『ヨーロッパの帝国主義—生態学的視点から歴史を見る—』ちくま学芸文庫、2017、548頁。

- 4) 前掲3), 279-312頁。
- 5) 訳注に「[「米国人類学の父」と呼ばれる]とあり、主著『古代社会』(1877年)で知られる。L.H. モーガン著、古代社会研究会訳『アメリカ先住民のすまい』岩波文庫、1990、419頁は、住居にとどまらない先住民社会全般の貴重な記録となっている。
- 6) ジャレド・ダイヤモンド著、倉骨 彰訳『銃・病原菌・鉄—13,000年にわたる人類史の謎—上・下』草思社、2000。
- 7) ハワイ併合は1898年、キューバの保護国化は1898～1902年のことである。このほか本文には、併合要求地の一つにカナダもあげられており、南北戦争後の米英関係がカナダ割譲をめぐって緊張状態にあったことは、服部之総「黒田清隆の方針」に詳しい。服部之総『黒船前後・志士と経済 他十六篇』岩波文庫、1981、204-217頁。
- 8) 19世紀における農業の機械化については、藤原辰史『トラクターの世界史—人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち—』中公新書、2017、3-28頁で説明されている。
- 9) マルクスとエンゲルスが1850年1月に書いた「評論」は、カリフォルニアの金鉱発見から「18ヵ月になるやならずの現在すでに、この発見がアメリカの発見そのものよりもはるかに大がかりな結果をもたらすこと」を予見し、太平洋が「現在の大西洋、古代と中世の地中海と同じ役割—すなわち世界交通の大水路としての役割を果たすであろう」との見通しを述べている。大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集7』大月書店、1961、226-227頁。この説は、服部之総「汽船が太平洋を横断するまで」で参照されている。前掲7), 38-64頁。
- 10) 前掲2) ①でも、鉄道のルート選定をめぐる利権争いが主題の一つとなっている。
- 11) イギリスの政治家・法学者で、①『アメリカ共和国』(1888年)、②『近代民主政治』(1921年)などを著した。本引用は①による。
- 12) 1791年成立のアメリカ合衆国憲法修正第1条「合衆国議会は、国教を樹立する法律もしくは自由な宗教活動を禁止する法律、…を制定してはならない」をさすと思われる。高橋和之編『新版 世界憲法集 第二版』岩波文庫、2012、75頁。
- 13) 社会思想家で、主著のヘンリー・ジョージ著、山寄義三郎訳『進歩と貧困』日本経済評論社、1991(原著1879)、435頁で知られる。
- 14) 代表作であるベラミー著、山本政喜訳『顧みれば』岩波文庫、1953(原著1888)、338頁は、西暦2000年の社会主義国アメリカをユートピアとしてえがき、大きな評判をとった。
- 15) この部分は前掲11) ①の引用である。なお、訳注によれば、この引用文の主語はトラストではなく、鉄道会社である。本章でプライスがたびたび引用されるのに対し、フランス人によるアメリカ論として名高いアレクシ・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー』(1835～40年)の引用が本巻を通じて見当たらないのは、興味あるところである。
- 16) 柴田匡平「エリゼ・ルクリュ『新世界地理—地球と人間』について」亜細亜大学アジア研究所所報162、2016、1-3頁。
- 17) ジュール・ヴェルヌ著、大久保和雄訳『グラント船長の子供たち 上・下』ブッキング、2004。なお、ヴェルヌと科学の関係については以下の著作に詳しい。フィリップ・ドラ・コタルディエール、ジャン=ポール・ドキス監修、私市保彦監訳『ジュール・ヴェルヌの世紀—科学・冒険・《驚異の旅》—』東洋書林、2009、335頁。
- 18) 手塚 章「フランスの地理学」地学雑誌121-4、2012、617-625頁。なお、フランスで刊行された世界地誌シリーズの系譜は、第1弾・第2弾がそれぞれマルト=プランとルクリュによる個人的な事業であったのに対し、第3弾はヴィダル=ド=ラ=ブラーシュの弟子たちによって執筆され、第4弾はブリュネが監修した。公益組織ルクリュについては、ブリュネ自身も「言葉遊びを越えて、ヴィダル派の伝統からの距離を主張する仕方」であったと語っている。シルヴァン・アルマン編、荒又美陽・立見淳哉訳『私はどうして地理学者になったのか—フランス地理学者からのメッセージ—』学文社、2017、26-27頁。同書では、アントワヌ・パイイ(1944～)も、「旅は地理学者の育成に不可欠です。弟と

ヨーロッパを歩いて横断したエリゼ・ルクリュのような人物が、その使命を抱き続けてほしいと思います」(122頁)と述べている。

- 19) 例えばジャン・ブリュヌ(1869～1930)は、「労働」を地理学の基本的理念の一つとし、労働

の視点から地理学をとらえていたルクリュについて論評したという。野澤秀樹『フランス地理学の群像—ヴィダル派研究—』地人書房, 1996, 136頁。